

俳人協会 岐阜県支部会報

第37号

発行者 大野 鶴士
 発行所 俳人協会
 岐阜県支部事務局
 〒500-8211 岐阜市日野東8-8-3
 横田 義男 方
 TEL・FAX 058-247-6552
 振替口座 00870-9-77529

第二十回 芭蕉の道俳句大会

未来の古典

— 記念の句、記録の句、記憶の句 —

加藤 かな文



加藤かな文講師プロフィール
 1961年愛知県生。1993年「槐」入会。
 岡井省二・児玉輝代に師事。1997年第
 6回槐賞を受賞。2001年、「槐」退会。
 10月、児玉輝代らと「家」を創刊し、
 編集発行人。2009年第一句集『家』を
 刊行。2010年第33回俳人協会新人賞を
 受賞。2011年10月児玉輝代の死去にと
 もない、「家」代表を引き継ぐ。現在、
 俳人協会幹事、日本文藝家協会会員。

一九九三年の夏、家の近くのカルチャーセンターで俳句を学び始めました。私は三十二歳で、夜間定時制高校に勤めていました。その俳句教室の講師が児玉輝代。児玉は当時六十七歳でしたが、私は彼女がどんな俳句をつくるのかを知らず、彼女が五十一歳の時に角川俳句賞を受賞していたことを知ったのもずいぶん後のことです。彼女が八十五歳でなくなるまで十八年間指導を受けました。なくなっても今年で十年が経ちます。

・日の当るところ日
 の春の水 児玉輝代
 ・落ちてゆく重さの見
 て秋没日
 “

私が出会った頃の児玉は、森澄雄の「杉」、宇佐美魚目・大峯あきらの「晨」、岡井省二の「槐」の三誌に所属していました。俳句教室に入って数ヶ月経ったとき、俳句を真剣にやっていたいなら社に入るといい、できて間もない「槐」がいい、と児玉に誘われ、私は「槐」に入会しました。

岡井が難解な作風の作家であることは後で知りました。岡井が病に倒れ意識不明となり別の主宰に代わるまでの八年間、「槐」で学びました。

・たとへなきへだたりに鹿夏に入る 岡井省二
 ・大鯉のぎいと廻りぬ秋の昼 “

岡井がなくなると一週間後、児玉を代表とする月刊同人誌「家」が創刊されました。二〇〇一年のことです。岡井が七十五歳でなくなって今年で二十年。奇しくも、岡井と児玉の忌日はともに九月二十三日です。

二人には他にも共通点があります。ルサンチマンのようなものを抱えていたことです。児玉は結社主宰にならなかつたし、岡井は十一冊の句集を出しましたが無冠でした。児玉の口癖は「俳句は左手の文芸」。右手は生活のために使え、という意味です。一方、岡井は「未来の古典」という目標を私たちに示しました。自分の作品が理解されないのはそれが「未来の古典」だから、と自分に

言い聞かせていたのかもしれない。

私もルサンチマンを抱えているのでしょうか。「未来の古典」という言葉に強く惹かれ、そのありようを妄想してしまうのです。かつて正岡子規は異様な情熱で、室町から江戸までの発句十二万句の分類作業に没頭しました。怠惰な私には、子規のような地道な例句採集はできません。しかしいろいろな切り口で俳句分類してみると「未来の古典」の姿が見えてくるような気がします。

俳句分類の一つとして「記念の句／記録の句／記憶の句」を提案します。海外詠、戦争詠、社会詠、震災詠、コロナ詠。たとえば、これらと「記念の句／記録の句／記憶の句」の関連性を考えてみたらどうでしょうか。これからも、宛先不明の「未来の古典」を探究していこうと思います。

（新型コロナウイルスの影響で「芭蕉の道俳句大会」が中止になったため、加藤かな文講師より講演の内容を原稿としていただきました。）

加藤かな文講師近詠（「家」より）

ものの芽のどれもまじめに雨を溜め

（二〇二二年四月号）

風船の糸まつすぐにふたりたがる

（二〇二二年五月号）

花吹雪口に紙吹雪のごとく

（二〇二二年五月号）

青梅をどどどと分けてもらひけり

（二〇二二年六月号）

蟻の道どこかへ連れて行つてあげる

（二〇二二年七月号）

石段が山にはりつく日雷

（二〇二二年八月号）

（松戸成郎選）

第二十回 芭蕉の道俳句大会

新型コロナウイルスの影響により、芭蕉の道俳句大会は、第十九回に続き、第二十回も当日の大会が中止となりました。幸い、事前投句の部は審査が実施できました。

芭蕉の道俳句大会は、二十周年を迎えました。長年開催されてきた芭蕉の道俳句大会が、どのようにして始まったのか、どのように変遷して来たのか、二十年の流れを一覧にしてみました。

◆入賞作品(応募句の部)

俳人協会賞

色を消し音消し飛驒の山眠る

岐阜県支部賞

木の癖は木に教はりて枝打す

岐阜県知事賞

初蝶と思ひある間に見失ふ

岐阜県議会議長賞

百段の先の百段梅香る

岐阜県教育委員会賞

白山の風を待みて紙を干す

岐阜市長賞

水面ごとくいと引き上げ蜷搔

岐阜市議会議長賞

田一枚隔てて話す花菜風

岐阜市教育委員会賞

大鯉のもんどり打つも涅槃寺

岐阜観光コンベンション協会賞

灯点して春の障子となりにつけり

秀逸賞

小春日や稚児のあくびの良き香り

不揃ひの切手貼りたる余寒かな

母に呼ばれて野遊びの終はりたる

家並より高き堤を焼きにけり

春の鴨布陣とらなず漂へり

寝返りをして春愁をうらがへす

鳥鳴くや爪を飾るに月と星

落日の波が風呼ぶ冬岬

柴田 恭雨

伊藤かおり

篠田 游

小澤 敏

加納 輝美

水上れんげ

安田 一義

遠藤 典子

蒔田多佳子

辻 清子

溝辺百合子

森 瑞穂

西田 拓郎

左高 宣子

飯田 正幸

木下 仁司

廣瀬あや子

加藤かな文先生の講評

鳥よ来よ千両一枝残しある
知らんとは言へぬ漢の懐手
良く笑ふ男の子も混じる雛の客
竹馬や頼りがひある友のゐて
大寒の水一掬の重さかな
母にだけわかる片言梅ふむ
心音のはじめの一つ風光る
なだらかな枯野を広げ古戰場
奴唄伊吹の風にのりにけり
欠伸へは欠伸で応ふ春の昼
草萌ゆる紙飛行機の着地点
船頭の昔語りや鳥曇
小島美智子
南 久美子
多和田瑠璃
小木曾恵子
藤塚 旦子
川上 元子
塚本 睦
樋口 絹子
早野 仁策
梅本 尚孝
長尾美千子
松尾 一步

色を消し音消し飛驒の山眠る 柴田 恭雨

飛驒の山々は美しい。黄緑、濃緑、赤や黄色。色彩が目まぐるしく変わる。飛驒の川は清冽で水量豊か。激流を魚群がさかのぼる。だが冬になると、山は枯れて色を消し、川は涸れて音を消す。飛驒への愛があふれる句。リフレインが子守唄のようだ。

木の癖は木に教はりて枝打す 伊藤かおり
漱石『夢十夜』の第六夜(護国寺の山門で仁王像を刻んでいる運慶は、木の中にある仁王像を掘り出しているにすぎないという話)を思った。作為より無心。その価値観に俳人ならば誰もが共感するだろう。

百段の先の百段梅香る 小澤 敏
登り切った百段が道半ばにすぎず、本殿までさらに百段あることを知る。それでも落胆ではなく、新たな期待が。梅の香りが一句を明るくするのだ。

大鯉のもんどり打つも涅槃寺 遠藤 典子
経を唱えるだけが悼む方法ではない。生き物たちにはそれぞれのやり方がある。宙に跳ねた大鯉が静寂を破ることもその一つ。水しぶきが光る。

(作成者: 萩原正三)

Table with columns: 回数, 大会年月日, 曜, 会場, 講師, 講話, 事前投句, 投句者, 当刻者, 備考・当日句の規定など. It lists the history of the Baekyo no Michi Haikai Taikai from the 1st to 20th editions.

※1 芭蕉の道俳句大会が始まったのは、2002(平成14)年のことで、当時の松井利彦支部長、長田等副支部長等が中心となり開催された。「芭蕉の道」とは芭蕉が歩いた道という意味ではなく、妙照寺と十八楼の間の芭蕉に縁のある地点を結んだもの、それを「芭蕉の道」と名づけた。芭蕉の道俳句大会が開催される以前は「芭蕉祭」として、妙照寺で供養祭が行われ、芭蕉翁の遺徳を偲んで、「記念句会」が行われていた。
※2 当日句は嘯目だと同じ様な句が続出し、名物である夜間の鶺鴒の句が詠めない等の弊害があり、第7回からは、当地雑詠(岐阜市長良川地域)に変更された。
※3 第13回大会から会場がホテル十八楼からじゅうろくプラザに変更され、当日句も当地雑詠から、場所を問わず兼題とするなど変更された。
※ 種々変遷し今日を迎えている。来年は節目の20周年を越えて、「第21回」を令和4年5月14日(土)じゅうろくプラザで開催予定です。来年こそコロナが終息し事前投句・当日句を実施し、会場の皆様と俳句を楽しむ大会になり、新たな一歩を踏み出したいと願っています。(萩原正三)

芭蕉の道俳句大会の歴史

不易なるものを

今津 大天

芭蕉の俳句と子規の始めた近代俳句とのもつとも大きな違いは「不易」を求めたか否かであると、この頃漸く思い当たった。俳句を始めてから、私はそれまで学んできた哲学と俳句を何とかして止揚したいと願ってきた。写生は重視するがそれだけでは何処か物足りないと感じてきた。

「不易流行」という言葉は知っていたが、しかし「不易」が何か分かっていなかった。芭蕉がどう思っていたかは知る由もないが、自分なりに「不易」を掴まえないければ、不易らしき言葉だけでは何ともならない、そういう思いに駆られてきた。

禅には「不立文字」と言って、真理を伝えるには言葉や文字では不可能という考えがある。仏陀も悟りを開いたとき、悟りの境地などとても人には分かってもらえないと考えたとされる。

しかし、ここが大切なところだが、仏陀も禅の師も何とか真理を語り伝えようと努力してきた。もちろん、悟りにはある種の修行が必要で、単に字句で伝えられるものではなかつたろう。

俳句はもちろん表現の芸術である。

もし、俳句で不易なる真理を表すとするれば、それこそ、仏陀や禅の師より絶望的になるのではなからうか。しかしながら、もし芭蕉が不易なる真理を悟っていたなら、表現の困難に絶望する必要など感じなかったに違いない。内心に真理があれば、表現の困難などは何でもないからである。

芭蕉に宗教的な求道心があったかどうかは知らない。しかし、「不易流行」という言葉をあみ出したことから「不易」が彼の関心事であったろうとは想像に難くない。そして「不易」とは「不易なる真理」のことだったろう。

以上は一つの解釈に過ぎず、全く個人の感想である。俳句に「不易」を求めるか否かは、個人の選択である。又、仮に「不易」を求める人があったとしてもそれを俳句に求める必要は全くない。



今津大天顧問

岐阜県支部 総会

事務局長 横田 義男

令和三年一月二十五日(月)、ハートフルスクエアG中研修室において午後一時三十分より支部総会がおこなわれた。(出席者二十五名、委任状百十三通、会員数百八十四名)。大野鶴土支部長の開会挨拶、その後議長に荻原正三副支部長を選出し議案の審議に入った。

第一号議案は「令和二年事業報告、及び収支決算報告」、横田義男事務

局長、各務恵紅会計、矢田邦子監事より報告があり承認された。

次に、第二号議案「令和三年事業

計画(案)同収支決算(案)」、質疑応答の後、拍手をもって可決された。

そして、第三号議案「令和三年度役員(案)」が支部長から報告され承認された。

事務局から、五年ぶりに俳人協会創立六十周年記念東海俳句大会が募集句のみで実施されるとの報告があった。募集期間は八月二十日から九月三十日まで(左記参照)。

俳人協会創立六十周年記念 東海俳句大会

主催 公益社団法人 俳人協会 主管 俳人協会岐阜県支部 俳人協会静岡県支部 俳人協会愛知県支部 俳人協会三重県支部

募集句 二句一組(未発表作品に限る 前書・ルビ不可) 複数組歓迎(専用投句用紙または「百字詰原稿用紙を使用) 俳人協会会員以外の一般の方の投句も歓迎

投句料 一組につき千円 郵便振替にて送金

【口座番号002701001109466 加入者名/俳人協会愛知県支部/「東海俳句大会 投句料」と通信欄に明記する】

募集期間 令和3年8月20日から9月30日まで(当日消印有効)

投句先 〒470-1203 豊田市幸町隣松寺108-13 江口和彦方「東海俳句大会係」

選者 今井 聖 佐怒賀直美 西山 睦 染谷秀雄 栗田やすし

加藤耕子 加古宗也 山本比呂也 中村雅樹 田口風子 笹瀬節子 甲斐遊糸 間島あきら 水野征男 関森勝夫 宮川典夫 辻 恵美子 大野鶴土 今津大天 宮田正和 西田 誠 石井いさお 坂口緑志

表彰 大会賞、秀逸賞、選者特選賞 (表彰式は行わず、賞品は郵送します)

県内結社近況

思いもかけない世となりました。コロナ禍となり、家居の日月が一年以上たちました。このようにななか、俳誌「濃美」はこの九月で百五十号となります。渡辺純枝主宰（岐阜市）が俳句結社「濃美」の命名者であります。平成二十一年（二〇〇九年）一月、俳誌「濃美」（太田博賀 代表）創刊号を発刊して、今年（令和三年、二〇二一年）で十三年間、一度の休刊もなく毎月発刊し続けています（事務局 太田眞佐子）。

令和元年、十周年記念として全会員一句掲載の「俳句手帖」（表紙装丁中原けんじ）を発行。ここでは、令和元年（二〇一九年）十月六日、岐阜グランドホテルでの十周年俳句大会及び主宰著『シリーズ自句自解Ⅱ ベスト百渡辺純枝』

濃美 祝百五十号

詩のある生活を

（二〇一九年十月十日初版発行 ふらんす堂）上梓祝賀の概略を記し、近況報告としたいと思えます（参加者約百五十名）。

大会は第一部記念俳句大会（含 上梓祝）第二部記念講演 第三部記念懇親会 で実施。主宰は、前著で次のように言われています。

「俳句を詠むという事は、自分の日常を詠む事です、と私は言い続けてきた。」「寺山修司から、旅をする時の車窓に映る景色が好きで、終着駅までずっと車窓にへばり付いています、という私信をいただいた事があったが、自分の事のように今思い返している。」「それぞれの草木に、今日も美しいわね、そう言いながら、季節の移り変わりをまじまじと噛み締める。」と。

文楽の幕間長き春田かな
青葉木菟即身仏の口の闊

純枝

妻でなく母でなき刻小鳥来る
冬の滝天涯といふところ得て
初空や西行の笠芭蕉の杖
これらは、百句の中の五句であります。百句の自句自解で、具体的に俳句を詠むことを、主宰は会員にご教授くださっています。

この著書を、大会参加者全員がいただき、各自の俳句づくりの指針としております。また、第一部の俳句大会では、主宰や高田正子先生（「藍生」所属、俳人協会評議員）選の特選句十句（後掲）の御講演をプレゼンでいただきました。

なお、大会賞は林玲子さんの作品でした。玲子
ほととぎす一声曉の雨払ふ

第二部では、加藤かな文先生（「家」代表）の御講演「私の俳句分類」。「記録句」「記念句」「記憶句」の観点から今までの俳句を分類し、これからの俳句づくりの具体的な方向を明らかにしてい

船戸 成郎



く、句作の御示唆を賜りました。

ところで、俳誌「濃美」は、この四月から関谷ほづみ編集長になり、加藤かな文先生を「金華散策」（金華集選評）にお迎えし、「濃美吟行案内」等の新誌面作りに取り組んでいます。

コロナ禍のなかではありますが、「詩（俳句）のある生活」が日常生活を豊かにし心穏やかにしてくれることを実感するこのごろです。

今後、「濃美」創刊十五周年、そして二十周年に向けて、句友と楽しく句作していきます。

大会特選句紹介（順不同）
〈主宰特選〉
天上へ供物高々朴の花
帰省子に糊の効かせし綿シート
達者とは靴音にあり柏餅
眠ければ眠る翁や瓜の花
吟行の妻の日傘がくるくると

関谷ほづみ
加藤カツ子
森 はな
千田 一到
斎田 茂

鶉供養会のご案内

白寿の手引いて茅の輪をくぐりけり
一滴のインク拡がる水の秋
梶子や休みの朝のしづかなる
冷麦や箸に杉の香故山の香
数式にあるしらべとや小鳥来る
〈高田先生特選〉
誰も居ぬ地球のやうな炎天下
露けしや生きる証の手術痕
欄外へ夕虹立つと農日誌
山笑ふ干菓子色の明るうて
白刃の刃毀れひとつ青嵐
表札に住まぬ長子や燕来る
音立てて芽吹きを囁す雨三日
向日葵の迷路戦死の父が立つ
母の日にただ細き手を撫でに行く

◇鶉供養会・鶉供養短冊流し
日時 十月十七日（日）午前十時より

場所 岐阜市長良大前町一
「靈天庵」（長良橋北を東へ）

◇鶉供養俳句会・参加自由
（貝寄風社主催・俳人協会岐阜県支部後援）

日時 十月十七日（日）午後一時より

場所 長良川うかいミュージアム
（岐阜市長良川鶉飼伝承館）・会議室

投句 三句
（当季詠も可）（投句切十二時五十分）

会費 千円

編集後記

◆残暑厳しき折、会員の皆様には如何お過ごしでしょうか。三十七号をお届けします。

◆俳人協会創立六十周年記念東海俳句大会のご案内を掲載しました。締切間近です。ご協力お願いします。

◆鶉供養会は、コロナ禍により変更される場合があります。ご注意ください。（藤田・小野木・船戸・横田）